

セッション G

「制度の政治思想史－政治哲学研究と政治思想史研究の交錯」

世話人：小田川大典（岡山大学）・安武真隆（関西大学）

司会：安武真隆（関西大学）

報告者：石黒盛久（金沢大学）・小田川大典（岡山大学）

討論者：村田玲（青山学院大学非常勤講師）・田中将人（早稲田大学非常勤講師）

参加者数：30名程度

専門化が容赦なく進行する現代の人文社会科学において、哲学的普遍性を志向しがちな政治哲学研究と、歴史的な文脈主義に徹しがちな政治思想史研究は、しばしばすれ違い、対話の可能性を見失う。だが、斬新な観点からの優れた思想史研究が、見慣れた古典のテキストの新たな理論的可能性を示唆するとき、両者の間には生産的な対話の可能性が現れる。今回の「制度の政治思想史」セッションでは、「喜劇」や「神義論」というほとんど誰も気づかなかった観念に立脚し、マキアヴェッリとロールズというすでに多くの研究が積み上げられている古典的な政治思想家のテキストから政治哲学の新たな可能性を剔抉した二冊の研究書、村田玲『喜劇の誕生：マキアヴェッリの文芸諸作品と政治哲学』（風行社、2016年）と田中将人『ロールズの政治哲学：差異の神義論＝正義論』（風行社、2017年）を取り上げ、前者を石黒盛久会員が、後者を世話人の小田川大典会員が書評し、著者二人との討論を試みた。

まず石黒報告は「マキアヴェッリ解釈の未来派」と題して、村田氏の著作の企図を、従来副次的に扱われてきた『マントラーゴラ』と『クリツィア』といった文芸作品を手がかりに、マキアヴェッリの政治思想を解明した点に求める。解明に際して、古代における「悲劇」（人間意志の挫折の不可避性）から、中世における「神聖喜劇」（現世での諦念と天界での霊的幸福）を経て、近代の「人間喜劇」（現世での人間意志の実現としての大団円）への展開という図式が提示され、その中に、マキアヴェッリの文芸諸作が位置づけられる。本書によれば、老いた世界の硬直性が、逆転・転移・分離・接合・死から生といった運動によって軟化する、という『マントラーゴラ』での演劇的・祝祭的モチー

フが、〈力量〉による〈運命〉の統御や、政治的生の最活性化という政治論を支えている。また『クリツィア』での新生児の誕生と老いたる者の死のモチーフが、政治論における国家の再生と重ね合わされる。

さらに石黒会員は、ネグリ=ハート『マルチチュード』を参照しつつ、村田氏の著作の意義として、近代的思考の創始者たるマキアヴェッリの未来への可能性を提示している点を強調する。マキアヴェッリ政治思想の喜劇的位相・祝祭性の中に、最先端技術の駆使により既存秩序を接合・転倒・破壊・解体・逆転し新たなるものを産出するマルチチュードの欲望を看取するのである。

続いて小田川報告は「ロールズ政治哲学の生成と構造」と題して、ロールズ理論に対して、宗教的信念の軽視（J. ハーバーマス）や現実的なものへの配慮の欠如（R. ゴイス）という形で投げられる通俗的批判に対して、田中氏の著作が、伝記的事実（卒業論文や従軍体験を契機とした信仰の放棄など）や近年明らかとなった新資料を手がかりとしつつ、宗教的信念に基づき、アウシュヴィッツ以降の政治的現実を引き受けるものとして、ロールズ理論を内在的に再構成したとする。かかる再構成により、『正義論』と『政治的リベラリズム』との間の関係、「正」と「善」との「合致」という「道徳心理学」、世俗主義リベラルならざるロールズの可能性、の三つの未決の課題について整合的解釈が可能となる。

また、本書の中心テーゼ、「差異の神義論」としての正義論を支えるものとして、『政治的リベラリズム』ペーパーバック版イントロダクションの末尾（「没道徳的であるならば…人類はこの地上に生き続けるに値するのか」）、さらに同書の削除部分での記述（神がこの世を善く作ったならば、人間は道徳的本性を持たねばならない）が、神義論の構造として、紹介される。本書では、かかる構造を前提とする「秩序だった社会」に着目しつつ、思想形成史的アプローチに基づいて展開される（ただし、本書の後半の論述について、小田川報告は、神義論的構成での説明可能性については留保を付けている）。

さらに小田川報告は、1) 道徳心理学における正と善との論理的関係について、正と善の「合致」という表現は妥当か、2) 卒業論文をどこまで重視すべ

きか、神義論の挫折を前提としたロールズの理論的展開の可能性はないか（宗教的な要素から一線を画したとしたものとして、ロールズの道徳心理学を継承としたヌスバウムなど）3）『万民の法』における「現実主義的ユートピア」にはフランクフルト学派の近代批判に対する応答が意図にあったのか、4）講義録を資料としてロールズの政治哲学を論じることの是非、5）伝記的アプローチで政治哲学者を論じることの意義、などについて質問・コメントが投げかけた。

次に『喜劇の誕生』の著者、村田氏から第一報告に対して応答がなされた。まず村田氏は、近年のマキアヴェッリ研究（石黒、鹿子生）と本書との比較を行い、近代主権国家体制の形成という現代的意義を強調する「先取り論」としての石黒氏の研究、時代文脈の中からの政治思想の形成という「根掘り論」としての歴史的再構成を志向する（現代的意義を否定する）鹿子生氏の研究に対して、本書はルネサンスの民衆文化からマキアヴェッリを理解する点で後者に近いが、同時にそれが（ネグリ＝ハートを意識したわけではないが）現代を理解する手がかりになる、というスタンスであることが表明された。第二に、田中氏の『ロールズの政治哲学』との関連性として、ロールズにおける苦難の神義論から差異の神義論としての正義論への転換は、マキアヴェッリにおける「神聖悲劇」から「人間喜劇」への展開に対応する上に、両著作とも、カッシーラのルソー論（悪の問題を社会・制度の問題とするオプティミズム）に触発されている点でも共通している、と指摘した。

続けて『ロールズの政治哲学』の著者、田中氏から第二報告に対して応答がなされた。1）正と善の「合致」については、訳語の妥当性については「一致」「整合」と訳す余地はあった。『正義論』ではカント的「合致」の要素が強いが、後期ロールズでは後退し、「合致」以外の余地が出てくる。2）神義論からの後退と理解するのが一般的なロールズ理解であるが、本書では神義論を広い意味での気質として解することで、神学的議論の世俗化として解釈しうる余地を出した。先行研究との差異化、博士論文としてのテーマの統一性という点も意識されていた。3）『万民の法』にはアドルノを意識している記述もあるが、フランクフルト学派をどの程度意識していたかは定かでないし、ゴイスの指摘に従えばあまり意識していなかったことになる。他方で、シュトラウス『自

然権と歴史』とロールズのユートピア概念との近接性は確認できる。シュトラウスのものとの対比が本書の隠れたモチーフともなっており、道徳心理学についても両者には近い点がある。4) 講義録を使用することの是非については、『公正としての正義 再説』も元来は講義録であり、内容的に見ても講義録は他の哲学的文献と同列に扱って良いと思われるし、海外でもそのような研究が進みつつある。5) 伝記的アプローチの妥当性については、規範理論研究をこれまで展開してきたが、本書については思想史的な色彩が強い。他方で思想史研究として見るとケンブリッジ学派のような厳密な方法論に即しているわけではなく、分析系の規範理論研究でも思想史研究でもないアイデンティティの揺らぎの中で、思想家の integrity に着目する「思想家研究」として、個別性に即して論じることの意義が表明された。

最後にフロアからは、主たる世話人の小田川会員に対して、両著作を同時に扱おうとした当初の企画意図についての質問があり、小田川会員は、『喜劇の誕生』であれ「神義論」であれ、過酷な現実と折り合いを付けて来た点に着目した政治思想・政治理論として、両者を同時に扱うこととしたとの応答がなされた。

また『喜劇の誕生』について、1) 「人間喜劇の二つの原則」（運動の静止への優位、若の老への優位）が『君主論』『ディスコルシ』に反映されているという点について、喜劇から政治論への反映という構図である必然性はあるか、マキアヴェッリの演劇的世界の体験が政治的著作について先行するという点の論証が成功しているか？むしろ並行しているのでは？2) 人間喜劇の二原則を基礎とした思想史について語りうるか？という質問があった。

村田氏からは以下のような応答があった。1) 通説的見解では、再就職のために『君主論』を執筆し、その後喜劇を執筆したという順序が前提とされるが、本書ではこれを批判し、彼の出自からしても、宮廷文化とは対照的な民衆の喜劇・祝祭文化が先にあると主張したい。喜劇はプライベートな世界とされ、公共的なものは悲劇と親和性を持って来た伝統があったのに対して、マキアヴェッリは、喜劇を公的な場に持ち込んだ、『君主論』の記述もまた民衆文化の喜劇的感覚が表明され、それが政治の世界に流入しており、固定的・古典的な規

範に拘泥することの危険性を強調するのがマキアヴェッリの喜劇の特徴である（この点に関連して、*arte dello stato* について、オイコスをあからさまに政治の問題を導入したマキアヴェッリというヴィローリの定式との近似性についてフロアから指摘があった。また、かかる前提を補強するための作業として、当時の民衆文化や演劇についての実証的な文学・演劇史研究を踏まえることが今後の課題であることが確認された）。2) については、ロールズにまで続く、弁神論・神義論が制度の問題となるカッシーラの・ルソー的問題設定における人間の楽観視（人為の力での悪の克服）の前史が、マキアヴェッリであると理解している。

さらに『ロールズの政治哲学』については、1) 思想史研究ではなく「思想家研究」とした場合、差異の神義論という分析概念が20世紀の政治哲学についてどう適用できるのか、2) ロールズを対象として、分析系に対する批判として、固有名による「思想家研究」でなければならない研究上の必然性があるのか、3) 固有名詞、歴史的文脈、テキストの結びつきを切り分け、概念の独立性を前提とした「思想家研究」は可能か、4) オークショットやシュトラウスはリベラルについて論じる際もホッブズに頻繁に言及するのに、ロールズにおいてホッブズ講義が転機とされ、自然法の導出過程にはホッブズへの近さはあるのに、ホッブズの存在感が低いのは何故なのか（シュクラールも同様）、といった質問・コメントがあった。

これに対し田中氏は以下のように応答した。1) ロールズに限定して「差異の神義論」という概念を設定したが、世界大戦とその復興の経験という点で、シュクラール等とも大元において問題意識が類似しているのではないか。2) 規範理論研究における分析系の台頭は認識しているが、若干の違和感を感じつつ執筆した。分析系が固有名を忌避し *argument* に特化するのに対し、敢えて問題提起すれば、文芸批評における、いわゆる作者の死や間テキスト性を評価しつつも、作者の特権性を無視することは出来ず、一回性や *integrity* に照射することで解明できる点があっても良いと考える。3) 歴史的な文脈との関係は、思想家・理論家内部においても様々で、ロールズは公共的な事柄から距離を保つことに自覚的な大学人であったため、政治史的な事項からある程度独立して議論は可能。とはいえ、近年ハーバードで新資料が公開され、ホロコーストと広

島のショック、50年代のコネル大でのキリスト教の講義など、メモ、書簡等を用いた思想史的研究が今後登場してくる可能性はある。4) 『政治哲学史講義』以外ではホブズはロールズにおいて利己主義の論敵であり、rational より reasonable を重視し、暫定協定と重層合意との区別を重視する道徳心理学的なロールズの観点からすると、恐怖に基づく正義の分配というホブズ的なモチーフは射程に入らないのだろう。なお、シュトラウスについてロールズは読んでいた可能性がある。オークショットも意識されていた余地がある。また、権力としての政治観と協働としての政治観（320頁）という二分法に基づけば、ロールズとマキアヴェッリとの違いが浮かび上がる。

本セッションは、小田川大典、安武真隆、犬塚元らが中心に行なっている共同研究の一環として行われる研究会でもある。2016年は松元雅和『応用政治哲学：方法論の探究』（風行社、2015年）を、2015年は鹿子生浩輝『征服と自由』を取り上げた。本セッションを通じて、制度をめぐる政治・社会的論点について問題意識の共有が図られるとともに、意見交換と討論の場が開かれていくとすれば幸いである。（文責：司会・世話人）